

基本CG15枚+α 本編たっぷり100枚収録!



ベスケベ
と未亡人
搾乳ライフ!
~FMなぱいぱいで
いきまくり~

未亡人の秋穂は、
母を早くに亡くした隣家の子供・直也を
実の子のように可愛がってきた。

秋穂は幼い頃と同様に世話を焼くが、
直也は一人の女性として秋穂を見ており、
思い余った彼に秋穂は襲われてしまう。

まの あきほ
真野 秋穂

夫に先立たれ一人暮らしをしている未亡人。
子作りすることなく独り身になり、
また保育士をしていたことから、性に関して奥手。





感じるど母乳噴出しちゃう体質の未亡人



おっぱい責めでマンゾ牝調教!!

直也くんは精子を注入された瞬間から「おっぱい責め」が大好きです。

「おっぱい責め」が大好きな直也くんは、おっぱい責めが大好きな直也くんから精子を注入された瞬間から「おっぱい責め」が大好きです。

「おっぱい責め」が大好きな直也くんは、おっぱい責めが大好きな直也くんから精子を注入された瞬間から「おっぱい責め」が大好きです。

「おっぱい責め」が大好きな直也くんは、おっぱい責めが大好きな直也くんから精子を注入された瞬間から「おっぱい責め」が大好きです。

十分後、おっぱい責めが大好きな直也くんは、おっぱい責めが大好きな直也くんから精子を注入された瞬間から「おっぱい責め」が大好きです。

「おっぱい責め」が大好きな直也くんは、おっぱい責めが大好きな直也くんから精子を注入された瞬間から「おっぱい責め」が大好きです。

「おっぱい責め」が大好きな直也くんは、おっぱい責めが大好きな直也くんから精子を注入された瞬間から「おっぱい責め」が大好きです。

「おっぱい責め」が大好きな直也くんは、おっぱい責めが大好きな直也くんから精子を注入された瞬間から「おっぱい責め」が大好きです。

隣の年下に変えられていく牝牛未亡人!



「ハグッ、イグッ、またイグウウウッ、ほひいひいッ!
危険! 卵子に濃厚牡精子れ種付けされながら、
卵み落ちアグメイギまひゅううッ、おとおおッ!」

「卵子孕み絶頂イグウウッ!
卵子も直也くん熱い精子れ
服されながら、隷属肉奴隷
ましゅううッ!」

「いっ、残ってる
精子れ子宮
いっ、いっ、
危険! 卵子確実に
てりゅううッ、
今、でりゅううッ!」

「ひっひっ
今直也くん精
受精しれりゅう
卵子まれ直也くん
征服されりゅう
「ひっひっ」
「マゾイキしちゃうのお〜!!」
「おっぱい叩かれて」

「ひっひっ
今直也くん精
受精しれりゅう
卵子まれ直也くん
征服されりゅう
「ひっひっ」
「マゾイキしちゃうのお〜!!」
「おっぱい叩かれて」

「秋穂さん、朝ご飯まだあ〜？」

「この目玉焼きが焼けたら出来上がりよ。もう少し待ってらてね」

直也くんのお母さんは彼が幼いころに亡くなっている。

だから彼のお父さんの海外出張が決まった時、まだ学生である彼を親の都合で海外に連れて行くかで苦悩した様子だった。

お隣に住んでいた私は、当時そのことを知って、思い切って『直也くんをうちに預けていただくのはどうですか？』と申し出た。

直也くんと一緒に暮らし始めてからは、それまで静かだった部屋がすごく賑やかに。あの人がいなくなっていたからずっと寂しかった心の隙間が、一人きりという淋しさが、埋まった気がしたから。

「秋穂さん、上がったの……ッ!? な、何、その格好っ!？」

裸にバスタオルを一枚巻いただけの私を見た直也くんが、驚いたような声を上げる。

「着替えを用意するのを忘れちゃって。」

みっともないどころ見せちゃってごめんね〜ね」

「……ボク、もうガマンできないんだ！」

秋穂さんがそんな風に、ボクを誘ってるみたいなの格好するから……!？」

「我慢？ 誘ってる？」

直也くん……のたかなんを——そう言っちゃって、私は気付いた。

私をぎらついた目で見つめる直也くん、そのスボンの股間が、大きく盛り上がっていること……。

「な、直也くん……まさか……、あっ……きゃあああっ——!？」

「直也くんっ!! なたを.....してるの、ダメよっ.....あぁっ.....!!」

「ふっこれが秋穂さんのおっぱいっ.....はあっ.....はあっ.....はあっ.....!」
「大きくて柔らかくて.....はあっ.....はあっ.....はあっ.....!」

あがるんっ

（そっか.....直也くん、
きつとママに甘えたかったのね.....。
おっぱいで甘えさせてあげたら、
落ち着いてくれるわよね.....）

「直也くん、いいわ.....」

「えっ?」

「私のおっぱい、好きにしていいわよ」

「す、好きに.....秋穂さんのこのデカパイを、
好きに.....あぁあっ.....!」

「ひぁッ——!?!」

「んあぁっ……な直也くんっ……!? ふぁっ、んはあぁっ……!」

「あぁ、すごいおっぱいだ……こんなに大きいものもすごく
柔らかくて、はあはあっ、指に吸い付いてくるみたい!」

「直也くん、そんなにがつついちゃダメえっ!
直也くんは、私に甘えたいんでしょ?」
優しく触らなきゃダメよっ、あふううっ!

「そんなんじゃガマンできないよ!
秋穂さんのおっぱい、吸いまくって
揉みまくって、味わいたいんだ!
誰にも渡したくない……」
ポクだけのモノにしたいんだよおっ!

「そんな……私は直也くんのことを
可愛い息子だと思っていたのに!」

「直也くんが、そんなにやらしい目で
私を見てたなんてえ……、んはあぁんっ——!」



「いけないわ直也くん、私たち、家族でしよう……? こんなことっ!」

「ボクは秋穂さんのこと、ただの家族だなんて思っていないよ! ずっと好きで、毎晩、オナペットにしていたんだからっ、ずりゆりゆうらっ!」

「そんな、酷いわ……んっあああッ!」

「ボクにおっぱいべろべろ舐められて、

秋穂さんの身体はすっかり悦んじゃってるよね?

ほら、こんなにコリコリにしてえ……

秋穂さんは息子だと思ってた男に

乳首舐められて感じる変態だったんだ!」

「ちっ、違っ……んあああッ、

変態なんかじゃないわ、あくううっ、

感じてなんかいないのっ、

はうんっ、違うのよおっ……!」

「違うよ! ボクにふさわしい変態牝の秋穂さんのおっぱいは、
じゅぶぶっ、ボクがたっぷり可愛がつてあびるからねえっ!」

「ひっあっ、はっあああんッ!」



「んひっ、ダメえええッ、ああっ、んっはあッ……!」

「イッた？ 秋穂さんイッちゃったの？ あははっ、ボクにおっぱい吸われてイッちゃったんだあ!」

（イッた……？ 私……直也くんにあんなことされて、イッちゃったの？ そんな……）

「もつとイカせてあげるっ、

ボクがもつともつと、

秋穂さんのいやらしい

おっぱいをイカせてあげるよおっ!」

「ダメダメええっ、ふはんっ……
あっああああんっ——!」

頭の中で閃光が炸裂してすべてが真っ白に染まってしまっそうなる

圧倒的な悦楽。

それが今、私の身体だけでなく、心をも支配していた!」

あちゅるるっ、

んっ

ぢゅぽっ

あっ
あっ
うっ



「お、お、お……お、お、お……お、お、お……お、お、お……」

「やめられないうつ……！」「ごまかしたんだから、セックスもさせてよ！」

「セツ……セックスなんて……そんな……！」

ギョッ

「秋穂さんのおっぱいだけじゃなくて、オマンコもボクのモノにしたいんだよおっ！秋穂さんのオマンコにボクのチンポ突っ込んで、何度も何度もザーメン中出ししたいんだっ！！」

「ダメよっ、いくらなんでもそんなことは……ダメえっ！」

乳

そこに、あの人にも言われたことがないような、獣欲の塊をそのままぶつけるようなストレートな言葉で私の身体を求められて……。

「ダメえ……ダメよ、私たち、仮とはいえ親子なんだから……！」

「無理だよ、ガマンできないうつ……秋穂さんの身体、最後まで味わいたいんだ！」

ズッ
ズッ
ズッ



「ひあっ……直也くん、ダメっ、やめっ……んああっ、ひううっ！」

「ふへへっ、秋穂さんのオマンコ気持ちいい！ はあ、はあっ……！」

「ダメえっ！ ガチガチのオチンチン、そんなに擦りつけないでええっ……私の身体も熱くなっちゃうの、はああん……！」

「感じてるのっ？ ボクのチンポで秋穂さんも感じてるんだねっ!? いやらしい身体火照らせて、オマンコぐしょぐしょにしてるんだねっ!!」

あはっ
ぐしょぐしょ

ゴキッ

私の乳首の先端からは、じんわりと母乳が滲み出していた。私は感じると母乳が出てしまう体質だけれど、あの人でない男の人に責められて、こんな反応をしてしまうなんて……

「もっと感じさせてあげるよ……秋穂さんの淫乱人妻オマンコ、ボクのチンポで『もうやめて、許して』って言うくらい、感じさせてあげるっ！」

「ななにを……ひっんんっ……!!」

「気持ちいいっ、秋穂さんのキツマン気持ちいいよおっ！
秋穂さんももっと気持ちよくしてあげるね……！」

(ははははのよんなんいよんははははの……なのこら……！)

「秋穂さんのオマンコ、愛液でドロドロのぐちよぐちよだよ！
ボクのチンポそんなに気持ちいいっ？ 旦那さんより気持ちいいんだっ!？」

ズッ
ズッ
おっ
おっ

(セックスが、こんなに凄い……気持ちよくて、
おかしくなりそうなものだったなんて……)

「私の身体、おかしいのおっ……ふあああつ！
トロトロになっちゃうっ、んひうううッ、
直也くんのおチンチンで、オマンコ蕩けるのおおッ！」

「うへへっ……秋穂さんがもっと素直になるように、
おっおっしてあげるよ……ほらっ！」

おっ
おっ
おっ
おっ

「ふっあああッ!? あっ、ああああんっ——!」

「さっき直也くんにおっぱいを吸われた時みたいに、頭が真っ白に……そんな……私、またイッてしまったの……?」

「秋穂さん、またイッちゃったんだね。ボクがもっと秋穂さんをイカせてあげるねっ! ボクのザーメン中出しで、秋穂さんをイカせまくってあげるっ!!」

「な、中ッ……!?! あんっ、ダメっ、それだけは絶対にダメえッ! やめてえっ、精液出さないでえっ、はんっ、ああああんっ!」

「そろそろでるうっ……!」

「ボクの子種汁、秋穂さんの子宮にたっぷり注ぎ込んであげるからねっ!」

「ふはあああッ……! ぬ、抜いてえっ、オチンチンミルク、射精しないでええッ! ダメっ、中出しは絶対にダメなのおっ!」

「ボクの精子で秋穂さんのエロマンコ、受精させてやるっ! 孕んでよ、秋穂さんっ!!」

「ダメダメええッ、中だけはやめて、お願いっ……あああッ、精液出さないでええッ、直也くんの精子で受精するの、絶対にダメええッ——!」



「いっあああつ、イクッ、イクウウッ！ 直也くんの精液オマンコに
中出しされて、私イッチャウウッ、息子の精子でイクウウッ!!」

「秋穂さんのオマンコ気持ちよすぎて、ザーメンいっぱい出るよおつ……!
あ、秋穂さんも気持ちいいんでしょっ!! 気持ちいいなら、
思いっきりやらしくイッてよっ、お願いっ……!」

「ダメえっ、またイッチャウのおおつ……直也くんの精液で
牝アクメしちゃうっ、あああつ、ひっはあああッ……!」

「ボクのザーメン中出しされて、何度もイキまくっちゃうほど
気持ちよかったんだね! 秋穂さんのオマンコは、
もうボクのザーメンの味覚えちゃったねっ!!」

「ち、違うっ……んっひらっッ!!」



「んあああつ、もうダメええつ、オマンコおかしくなっちゃうう！」

直也くんのオチンチンでおかしくなるううつ、

も、もうダメなおお……はひいんつ、これ以上突かれたらあ、

ひああん、オマンコ本当に壊れちゃうう、ひぐつ、くふううつ！」

直也くんが腰を打ち付けるたびに、私の愛液と直也くんの精液が

混じったドロドロの白濁液が、私の秘唇からぶじゅつと噴き出る。

直也くんのオチンチンの動き、そのすべてが、今の私にとっては快感だった。

んあ

ズキズキ

しゃぼん

んあ

「や、やめてえ、直也くんのザーメンの匂い、付けないでえ……あひい、直也くん専用オマンコになっちゃうう、ダメなおお、んっひいっ！」

『ふへっ、まだ終わんないよ……もっとたっぷり秋穂さんの子宮に

ボクのザーメン注ぎ込んで、秋穂さんのオマンコをボク専用オマンコにするから！』

「ひあ……あうら、んふうっ！ ザーメン、溢れりゅううっ……はひっらっ……」

繰り返して直也くんの中出しされ、絶頂させられた私は、もはや何も抵抗の言葉を口にできず、ただ喘ぎだけを漏らしていた。それは、生まれて初めて経験した、絶頂の果て……あの人とのセックスでは経験したことなかった、女の、牝の目覚めだった。

「オマンコ、直也くんに墮とされちゃったあ……んひっ、子宮もザーメンでパンパンになってえ、匂い付けられてりゅ、あふうっ！」



「うへへっ、これで秋穂さんのおっぱいもオマンコも全部、ボクのモノだね！ これからもいっぱい秋穂さんに種付け中出ししてあげるから……楽しみにしててよね、うへっ、ふへへっ」

「直也くんはこれからも、私にこんなことをするつもりなの……？ ダメよ、私は直也くんの母親代わりなんだから、そんなこと……」

「直也くんの精子、また出してもらえるの……」

「はひっ、嬉しい……はんっ、ふああんっ……！」

(昨日は直也くんと、あんな……らやらしら行為をしてしまったけど……あれは一時の気の迷いよね。普通に。今までと変わらなように振る舞いなまやらげならの(……))

「今まで通りになるなんて、もう無理だよ……ボクは秋穂さんのこと、もう女としてしか見れなびんだから——!」

「ふあっ……あんな、ダメ、こんな……んふっ、ふはあんっ……!」

「いいじゃん、昨日はセックスまでしたんだからさあ、じゅるっ!」
ボク、秋穂さんのおっぱい飲みたのなあ。ねえ、いいでしょ?
このおっぱいにパンパンに詰まってる秋穂さんのミルク、飲ませてよ!」

ちやく

ちやく
ちやく

「ぞ、そんな……私のおっぱいを飲むなんて……!」

「ボクは秋穂さんのおっぱい揉むからさ、秋穂さんはボクのチンポ扱いてよ。ねっ、いいでしょ?」

んぐんぐ



「ほらほら秋穂さん、おっぱいで感じてないで、ボクのチンポもしっかり触ってよね」

(ああ、なんて硬くて大きいの……それにすごく熱いわ、まるで手のひらが灼けてしまいそうなくらい……あふぅぅぅ)

「ふへへっ、手コキは気持ちいいけど、それだけじゃ足りないよ。ボクは秋穂さんのおっぱいを飲みたいんだからね」

「あんっ！ そんなに強くしたら、ふああっ、出ちゃうわ、ミルク出ちゃうわ、んふぅぅっ、ああっ！」

「乳首もプリプリになって、もう搾乳準備万端って感じだねえ？ 秋穂さんのおっぱいは、甘くて美味しいんだろなあ……」

「んひっ、ダメっ、出ちゃうぅっ……ミルク出るぅっ……！」



「ふっあぁあぁあぁ……!! 出ちゃうぅ、おっぱい出ちゃうのぉ……!!」

「うわぁっ、秋穂さんの母乳だぁっ!!」

「んあぁっ、ダメえっ、おっぱい搾っちゃダメえっ、ダメよ直也くん、おっぱいは赤ちゃんのためのモノなんだから……はふうっ、こんな風にオモチャみたいになったら、ダメなの……はぁあんっ」

「いいじゃん、ボクだって飲むために搾ってるんだからさぁ」

「えっ……? の、飲む? 直也くんは私のおっぱいを飲むつもりなの?」

「もちろんだよ!」

チンポだけじゃなくて口でも、秋穂さんの味を感じたいんだ。ほらぁ、手が止まってるよ、秋穂さん? おっぱい搾られて気持ちいいのはわかるけど、ボクのチンポも気持ちよくしてよぉ」

「ち、違っ……!! ……わ、わかったわ……んっ……!!」

びゅるっ

ジュジュ

んっ
んっ
んっ



「ふあっ、あつあつ、んはああんっ！ はっ、直也くんのおチンチン、
また大きくなって……ふああ、ドクドクしてるのお、手熱いっ、くふうううっ！」

「ふへへっ、秋穂さんの手が気持ちいいからねえ。それに母乳の匂いもしてるから、興奮するよお、きゅん、きゅん……んんんっ！」

（あぁっ……直也くんが、私の母乳飲んでるうっ……！
赤ちゃんのためのミルクが、直也くんの中に入っていつてるのお！）

「……ふはあっ!! ふう、美味しかったあ!!

……へえ、ボクがおっぱい飲むの見て、
秋穂さんも興奮してたんだねえ？

乳首なんでもうコリコリに
勃起しちゃってるよ？
もっと虐めであげるねっ！」

「はっううううんっ！」

乳首伸びちゃううっ、おかしくなるっ、
んひいっ、私おかしくなっちゃうう、
おっぱいでヘンになるううっ……！」

「もっとエロエロのドスケベおっぱいになってっ！
思いっきり下品なセリフ言いながらイッてよねっ!!」

「あひいっ……!!」



「イクッ、イクウウウッ！ 直也くんにおっぱい虐められながら
イツちゃうううっ、乳首イキしちゃうのおおっ、おっひらっ！」

繰り返し押し寄せるアクメの波によって、
私の乳首からはさらに母乳が勢いよく噴き出していた。

(私……満足している……直也くんに責められてイカされたのに、
身体は気持ちよくなって……心も、幸せになっちゃってる……)

(ダメ……ダメよ、息子と
変わりない男の子といやらしい
行為をするなんて、本来ならば
いけないことなのよ)

快感を打ち消そうとそう必死に考えても、
私の身体の熱はなかなか収まってくれなかった――。



私はスポーツで直也くんの欲求不満を満たそうと、彼と一緒にテニスコートにやってきた。

「ふああっ——！ やめっ、んはああ、お願い、こんな場所でエッチなこと、しないでえ！」

「秋穂さんのオマンコは、もっと奥まで見てほしいようにヒクヒクしてるけどなあ？」
「ここなんて特に」

「そ、そんなところ、んひいつ、触っちゃダメ、こんな場所でこんなことお、くふう、ダメなおお……！」

「わっ、またオマンコ汁が溢れてきた……
すごいなあ、
いつ人が来るかわからないような
こんな場所で見られて、
秋穂さんはオマンコ濡らしてるんだね」

「ち、違う、んふう、
こんなこととして
感じているなんて、
違ううっ……
はんんっ……！」

「まだ認めないの？ しょうがないな、認めさせてあげるよ」
「これ突っ込んだらすぐにわかるよね……秋穂さんが淫乱な、オマンコマンコの持ち主だって——！」



「ああああっ！ オチンチン挿れられただけでイッちゃうのおっ、ふあんっ！」
そそり立った肉棒で一気に貫かれて、私はあっけなくアクメに達してしまった。

「ダメダメ、こんなのおっ……おかしく、なっちゃろう、
オマンコも身体もおかしくなっちゃろうの、
ひはあんっ、ダメよおっ……！」

「このオマンコはむしろ悦んでる
みたいだけなあ？ いい加減認めなよ、
秋穂さんの身体はボクのチンポ専用にな
ってるってこと。そしたら、もっと
気持ちよくしてあげるよお？」

「んくうっ、直也、くんっ、
もうやめ、やめてえっ！」

「秋穂さんの身体はボクの
モノだっでこと、
まらだわかってないのお？
まったく、そんな物分かりの
悪い牝には、おしおきするよ？」



「お、お仕置さ……？ あっ……あっひらッ!!」

ズニユッ

「あひいいい、母乳噴きながらイツちゃううううっ！
ぶたれて痛いのが気持ちよくなってイツちゃうのおっ！
ミルク出るうううっ、ミルク噴きながらイキますうっ、
おっぱいミルクでイツちゃうのおっ、あおおおっ！」

「あははっ、気持ちよすぎて母乳噴いちゃったんだあ、
秋穂さん！ 気持ちよかったでしょ？
もっと気持ちよくして、イキまくることしか
考えられなくなるようにしてあげる！
秋穂さんのオマンコに、またボクの
ザーメン注ぎ込んであげるからねっ！」



（直也くんの精子、注ぎ込んでもらえるのっ……!!
私のオマンコ、直也くんのザーメンでパンプンにしてもらえるのねっ!!）

「いや、そんな……ダメ……ダメなの……」

「まだそんなこと言ってるの？
しょうがないなあ、物分かりの悪いマゾ牝には……」

「ひ……なにをするの……」

「もちろん、これだよ……そらあっ！」

「おほおおっ、イグイグイグウウウツ、
ぶたれながら変態アクメしちゃいますっ、
潮吹き変態アクメすりゆううううう！」

「わあ、秋穂さん、ぶたれたのに
潮吹きながらアクメしちゃったんだ？
変態だね。秋穂さんは変態の淫乱牝だ。
変態マゾ牝だよ、秋穂さん」

「へ、変態マゾ牝うう……私の身体、
変態マゾ牝の身体になっちゃったのおお……
くひらっ、ちめえ……もうちめえええッ……」

私の身体は変えられてしまっているのだ……
直也くんによって。

(母の曰きっかけに、直也くんとは普通の親子関係に戻れるかと思ったのに……。贈られたのがこんな下着だなんて……)

たぶっ

たぶっ

ストリッチ

「ふへへっ、秋穂さんのために頑張って選んだんだよ。これはあ、これが秋穂さんのパイズリ……！ はあはあ、おっぱい柔らかくて、ふうっ、すっごく気持ちいい！」

「ダ、ダメえ……オチンチン、ダメええっ、あふううっ、おっぱい熱くなって、おかしくなるううっ、ひっんんんッ！ やめてえ、オチンチン当てないでえ！」

「ダメだよ、この程度じゃボクのチンポは収まらないもん。もっとしないとねっ——」

「ダメよお、激しつ、ひんんつ、
激しいのダメええつ、
そんなにすごいので
ズンズンしたら
おっぱいヘンに
なっちゃうのおっ！」

アッ
アッ

「んあああつ、そんなに
オチンチン突き出さないでえ、
擦れるううつ、ふぐううつ、
熱いオチンチン擦れて、
おっぱい熱くなるううつ！」

「パイズリも、オママンロでするのは
違う感じがして気持ちいいでしょ？」

「ぎ、気持ちよくなんかあつ、あんつ！
気持ちよくなんて、ならつ、
感じてなんかないのお、
あうううつ……！」

「ウン言のちやダメだよ。
秋穂さんおっぱいでむちやくちや
感じちやつてるよねえり？
乳首なんて、ほら——」



「ひっあああああ~~~~ンッ!!
乳首、ダメえええっ、伸びちやうっ、
ヘンになるうううっ、」

勃起乳首に
電気流れちゃうううっ!」

「ふへへっ、秋穂さんの乳首、
母乳溢れてる! そんなに
気持ちいいんだ、
ミルク噴いちゃうほど」

「んはあっ、またミルク出るうっ、
おっぱいからミルク噴いちゃううっ!」

「出るううっ、おっぱい
びるびる出るのぉっ、
ミルク出るの止められならっ!」

「秋穂さんってさあ、
おっぱい弱いよねえ、
おっぱい責められるの
好きでしょ? 今みたいに
虐められると感じちゃうんでしょ?」

「違うわ……虐められて感じるなんて、
そんなわけない、ふあっ、あっああっ——!」

「ほらあ、チンポでおっぱい思い切り虐められて感じてるじゃん。秋穂さんのおっぱいはマゾおっぱいだね、マゾパイだ！」



「ち、違うっ私マゾ
なんかじゃ……はひいッ！
ふあっ、ダメええっ、
おっぱい掻き混ぜないでええっ！
オチンチンでおっぱい
ムチャクチャにしないでえっ！」

「そう言ってるけど
身体はおっぱいでチンポハマられて
気持ちいいんだよね？
秋穂さんは喘ぎマゾだっ！
おっぱいマゾだ、
エロデカパイのマゾ牝だあっ！」

「おっぱいマゾおお、
私直也くんのデカチンで
おっぱい犯されて感じてる、
おっぱいマゾ牝なおおっ！」

「ふひひっ、ボクのチンポから
離れられなくなるくらい、
イカせまくってあげるっ！
いっぱい使って、ボクの
チンポ専用のマゾ牝
エロパイにしてあげる！」

「もっとしてええっ、
はああんっ、私のエロおっぱい、
直也くんのデカチンで
もっと犯してほしいのおお、
牝おっぱいにして
ほしいのおおっ、ひんんっ！」

「エロ牝おっぱい、
直也くんのオチンチンの形に
なっちゃうう、はひいっ、直也くんの
デカチン専用パイになるううっ！」

「も、もう限界だあつ……
秋穂さんのパイズリで、
ザーメン射精するううっ、うぐうっ」

「イッ、イクウウツ、イッちゃううっ、
特濃精子ミルクおっぱいに出されてっ
濃厚ザー汁でマゾ牝おっぱい
犯されながらイッちゃうううっ！
白濁ザーメンの匂いマーキング
されながらイッちゃうううっ——！」



「ふあああつ、イクウウウツ！」

直也くんのドロドロ精子

おっぱいにぶっかけられて、

ザーメンアクメしちゃううっ、

牝パイイクウウツ、ひはああんっ！」

ニヤ

ヤアツ

ビクッ
ツッ

「すごいイキっぷり

だったねえ。

まるで本当にセックス

してる時みたいに、

イッちゃったね。

母乳も噴いてたし……っ」

「ふああん……おっぱい犯されて、

イッちゃったのお……おっぱいで

直也くんのオチンチンとザーメン

感じながら、何度もイッちゃったあ、

私、おっぱいだけでこんな

イッちゃうなんて……もう、

マン牝なのね、んはあ、直也くん

だけのおっぱいマン牝だわ……」

とんぱん
とんぱん

ズンズン

「ふんこれ……搾乳器？ ミルクを吸い出すための……」

『そうそう、コレで秋穂さんのおっぱいに詰まったミルクを吸い出せば、秋穂さんも苦しくなくなるでしょ？』

コレで秋穂さんのパンパンのおっぱい、吸いまくってあげるからっ！』

「えっ……イヤっ、ああんっ!?
やっ、イヤあっ！ 直也くん、
これ外してえ、あんっ、こんなこと
ダメえ、あふっ、んんっ！」

直也くんを抱きつかれた私は、
胸をさらけ出されて、搾乳器を
両方の乳房に付けられていた。

「ふひひっ、さすがボクが
選んだ搾乳器。

よく似合ってるよ、秋穂さん！」

ふんっ

ズルッ

ズルッ

「イヤっ、あっ、あああんっ！ やあっ、おっぱい吸われちゃってるぅっ、ひんっ、はあああんっ！」

動き出した搾乳器が、私の右の乳房を吸い上げ、母乳を搾り取ろうとする。直也くんにおっぱいを吸われるよりもずっと強い、まるで乳腺に詰まった母乳を全部吸い出すような震動は、私が初めて味わうもの。

「すっくい、ミルクがびゆるびゆる出て溜まっているよお！ 秋穂さんのおっぱい、こんなにミルクが詰まってたんだあ、すごいすごいっ！」

「イ、イヤあああつ、ダメえつ、搾らないでええつ…… 母乳噴くのダメえつ、こんなつ、私牛じゃないっつ！」

「嫌がっても、ミルクは止まんないでぶびゅぶびゅ出てるけどねえ？ こっちのおっぱいはどうかなあ？」

ぐんっ

「あうううっ、そんなに強く搾られたら、はぁんっ、おっぱい壊れちゃうっ、ひんっ、はっひららんっ！いらけならのた、あふうっ、搾乳器でこんなことおっ、ダメなの母乳止まらならるっ……！んくっ、ふううんっ！」

搾り取られる感覚から逃れようと私が身体を揺らすと、反動で搾乳器がより強く乳房に吸い付いて動く。

ハッ
グッ

「あひいっ！っ！」

搾ったら牛みたいだに
ミルク出るうッ、

いっばいミルク

噴いちやうううっ！」

「おっぱい搾られるの、

そんなに気持ちいいんだあ？

赤ちゃんのための道具で感じるなんて、

秋穂さんはエロエロの変態だねえ！」

「へ、変態じゃないいっ、

おっぱい搾られて感じてなんかあつ、

あひいっ、ないのおおっ……！」

「素直じゃないなあ、こんなにミルク出してんの……仕方ないな、もっと吸ってあげるよ——！」

ハッ
グッ

「ああ、直也くん……私、もうガマンできなはらのお、あふううっ……！」

秘唇からとろとろと愛液を垂らす私の姿を愉快そうに見ながら、直也くんは意地悪く微笑む。

「んんん？ どうしてほしいらの？
ちゃんと言ってくれなきゃわかんないよお」

「あ、ああつ、それはあ……
あふう……な、直也くんの
オチンチンが欲しいのおっ！」

身体の疼きに抗うことはできず、
私は浅ましくお尻を振って、恥も外間もなく
直也くんにオチンチンをおねだりしていた。
媚びるように身体をくねらせながら、
秘唇を直也くんの身体に擦りつけて、
ペニスを求める。

「もう準備万端の私のオマンコに、
直也くんのオチンチン挿れてほしいっ……
オチンチンでイキたいんれしゅ……！」

ガッガッガッ

数時間後……。

「あんな道具でおっぱい搾られたのにそれでもイクなんて、秋穂さんは変態だなあ。もう完全に変態マゾだねえ」

「わ、私……変態マゾ……」

「そうだよ、秋穂さんは変態マゾ牝だよ。ほら、自分でも言ってみて。」

「私は変態マゾです」って」

「ち、違うう……変態じゃないのおお……おっぱい搾られるのは気持ちいいけど、変態マゾ牝なんかじゃないっ……!」

「おおっ、オマンコ

また締まったっ……!?!」

変態マゾ牝じゃないって

言いながら感じて、

オマンコ濡らしちゃったんだね?

秋穂さんはもう救いようのない、

変態マゾオマンコだねえ」

おっ
おっ

おっ
おっ



休日の今日、私は直也くんに誘われて、街へとデートに来ていた。ここはトイレの中。

「イヤっ、こんなのイヤよおっ、」

私の痴女みたいな格好、見せつけなさいでえ、ふああんっ！」

「いやらしい格好しながらおっぱい丸出しにして、
感じてるんじゃないの？ まったく……自分がいやらしい身体だって
認めないマゾ牝には、お仕置きしないとダメだな……そらっ——！」

「あふううっ！ おっぱい、へんなのに気持ちいいのおっ、あふっ、
おかしくなっちゃう、はん、身体、変態になっちゃうのお、ああんっ……！」

「なっちゃう」じゃなくて、秋穂さんの
身体はもう変態なんだよ。

今だって、ボクにおっぱいぶたれて感じて、
息が荒くなってるじゃない。自分が牛みたいだ
デカいおっぱいぶたれて感じる変態の
マゾ牝だって、いい加減に認めなよほらっ！」



「ふっはあんっ！ ダメええっ、マゾおっぱいになるううっ！
私のおっぱい、変態マゾ乳になるううっ、はしたないマゾ牝の、
エロおっぱいになっちゃうううっ！ 乳首勃起しちゃうのおおっ、んんんっ——！」

「んひひひひひっ、イクイクウウウツ、変態勃起乳首から
母乳びゆるびゆる噴きながら、イクウウウッッッ！
変態おっぱいイキましゅっ、あひひんっ！」

母乳を噴き出ししている敏感な乳首を引っ張られるたびに、
乳首にびりびりと刺激が走り抜ける。

「んん？ 秋穂さん、もしかしてオマンコ濡らしてる？ ボクのチンポ欲しいの？」

（あっ……くるの、

おチンポさちやうのっ……!?

私の濡れ濡れのオマンコ、
直也くんのおチンポで
ハメられちゃうのっ!?)

オムオムッ

ビクッ

ビクッ

「……やっぱやめた。ねえ、
いつまでもこの格好なら、
どっか行っちゃよ」

「え……この格好で？」

「うん。せっかく普段とは違う格好してるんだからさ、公園にでも行かなくっ」

「な、直也、くん……私恥ずかしいわ……みんな見てるし、絶対にへんな女だっと思って思われてるう……」

「そんなの、気にしなくていいよ。ねえ、あそここのベッチで、通行人に見せつけながらセックスしようよ。ボクもうガマンできなげよ」

直也くんが指さした先にあるのは、公園のベンチ。あんな場所でセックスしたら、道行く人たち全員に見られてしまう……。

ビクッ

「うわっ、あれ何やってんだよ!!」

「セックス……じゃなくて素股?信じられない……変態じゃな」

「そう、私、変態なおおっ、公園でオマンコとおチンポ擦りつけて興奮してる、はひっ、変態なおおっ」

「ふひっ、みんな注目してるねえ。秋穂さん、せっかくなんだしおっぱい出して自分で揉んで、あの人達に見せつけてよ。秋穂さんがオマンコとおっぱい出して感じる変態だっ、今こゝで証明するんだ。おっ、おっ」

ビクッ

ビクッ

「んあぁっ、オマンコ見せつけながらおっぱい揉んでる私の姿、はんんっ、もっと見てええ、ひはあっ、ドスケベ淫乱の私をもっと見てえっ！」

「ふひひっ！ こんな極上の牝牛がボクのモノだっこと、見てるヤツら全員に言いたいよ」

「私、牝牛なのおおっ、んひいっ、エロデカ乳の牝牛の姿、みんな見てえっ、はひっ、んっあぁあっ！」

「お願いのっ！ ガチガチになってるこのおチンポもっ、はああんっ、早くちようだいっ、お願いなのおっ！」

「よし、じゃあ……焦らされてドロドロになってる秋穂さんのオマンコに、チンポあげるよっ——！」

「くるのっ、はあんっ、直せくんのおチンポ、やっとおマンコにハマてくれるのおっ、あうううんっ——！」

あひゃう



「あひっっっっ、イグウウウウッ、牝牛マンコにデカチンポ突き刺されてっ、おひっっ、アヘイキしちゃうのおおっ、即イキすりゅううっ、ひはおおんっ！」

臍内を満たす直也くんの熱を感じて、私はまた絶頂に駆け上る。信じられないものを見るような視線で、蔑むように私を見る、通行人の女性たち。

「あんっ、私変態れしゅうううッ！公園でガチガチのおチンポ啜え込んで気持ちよくなってるの、変態なんれしゅうううッ、おはおおっ！」

「ふひっ、やっと自分でも認めたね。

これで秋穂さんは正直正銘の、みんなが認める変態だねえ。

もっと自分でも腰振って、思い切りセックスしなよ。

見てる人達が呆れるくらいだね」

「ははっ……んっ、あはあんっ——！」

どろぼう

あざむ

イッブッ

いっぶっ

「もっとだよ、もっとっ！ オマンコが壊れるくらい思い切り腰振って、
見てるヤツらに自分がボクの牝だってアピールしなよ！」

「ひっおおおっ、私、直也くん専用の牝牛マンコれしゅうううっ、んおおおっ！
このおチンポ専用の、あふうっ、種付け牝穴なのおっ、おっひいっ！」

アッ

「やだ、あの人、見られて
感じてるわけ？ どうか
おかしいんじゃないのぉ？」

アッ
アッ

アッ

「おっ、おおおんっ、私は変態のらッ、
ドスケベな変態淫乱牝でしゅうううっ！
変態牝の淫乱オマンコ見てえっ、
おチンポ啜え込んでるエロマンコ見てっ！」

「でるうっ！ ボク達を見てるヤツらの前で、
秋穂さんの子宮に種付けするぞっ！」

「してっ、種付けしてええええっ、ひやうううっ、直也くんのこっつり
ドロドロ種付けザーメンれ、私のオマンコに匂い付けてええっ！
みんなが見てる前で、はぎいっ、オマンコマーキングされたらええっ、
むおおおんっ、精子漬けたしれはひらららッ——！」

アッ
アッ

「んっおおおおおッ、イグウウウッ、濃厚孕ませザーメンれ
卵子染め上げられえっ、はぎいっ、イッちやいまひゅうらうらうッ、おおんっ！
牝マンコに子種汁注がれながら変態アクメしちゃいまひゅうらうらうッ！」

「うおっ、秋穂さんのオマンコ、締まるっ……！」

「んひッ、ザーメン注がれてまたイッちやうらうッ！
んっおおおッ、牝マンコザー汁イキしまひゅっ、
種付けイギすりゅうらうッ、おっおおおッ！」

びゅびゅんっ
びゅんっ



「はひひひんっ、アクメ止まんないっ……ひほおっ、
絶頂止まらなっのおおっ、ミルク出ちゃうっ、おほおっ、むおおんっ……！」

「秋穂さん、気持ちいいっ……最高のマツオマンコの秋穂さん、愛してるよお！」

「わ、私も……直也くんのこと、
好きっ……愛してるっ……
こんなマツのこと愛してくれるの、
大好きな直也くんしかいないっ……！」

「私たちを見ていた通行人の女性たちが、
気まずそうな表情を顔に浮かべていた。
けれど今の私にとっては、そんな蔑みの態度や言葉も、
自分がマツの変態だと刻みつける証で、悦びで——」

「みんなあー、変態の私を見てえっ、おひっ……
母乳噴きながらイっちゃったマツの変態牝を、しっかり見てねえっ、んひっ……」



公園で、あんな恥ずかしいセックスをしてしまった翌日の夜。

「うああ、気持ちいいっ……！ぬるぬるしてて、前したパイズリよりおっぱいがチンポに吸い付いてくるみたい……くううっ！」

「んっふうっ、おっぱい抜きで、おチンポ気持ちよくなってるのお、くっふううんっ、パイズリ奉仕気持ちいいのおっ、はんっ、あふうっ！」

「もっと激しく擦ってっ……乳首も使って、秋穂さんのおっぱい全部で、ボクのチンポ扱いてっ！」

「あんっ、くふああっ、おっぱいオマンコ代わりにされてるうっ、んひううっ、直也くんのおチンポで、おっぱいオマンコみたいに犯されてるのおおっ……！」

「乳首を自分で潰して、扱いてごらん？淫乱な秋穂さんの身体なら、絶対もっと気持ちよくなるよ」

「は、はひ……んっ——」

おにゅっ



「あひっ、んっふううううっ！ 乳首気持ちいいっ、おっぱい出ちゃうのおっ、んひいっ、乳首抜きイイイイッ、はひひんっ！ あっ、ああんっ、感じすぎてミルク出ちゃったのおおっ……あひっ、乳首ジンジンして母乳噴いちゃったあん、あふ、んううっ……！」

「ふへへっ、自分で自分の乳首虐めて感じてるんだ？ とんだマゾおっぱいだなあ」

マゾ

「そ、そんなのお、私のおっぱい、マゾ乳なおお、あふんっ、虐められて乳首勃起させちゃう、いやらしいマゾおっぱいなおっ！ マゾ乳首、グリグリされると気持ちいいのおおっ、淫乱おっぱい虐められると気持ちいいっ！」

マゾ

マゾ
マゾ
マゾ

マゾ

マゾ

「じゃあもっと虐めて、徹底的に犯してあげないとね、秋穂さんのエロ乳ッ……！」

「んおおおおっ、熱いデカチンポれおっばい犯されりゆうらうっ、ひああっ、私のおっばいオマンコになっちゃってるうらうっ、あひいっ！オマンコみたいに犯されてるのおっ、んおおっ、おっばいマンコなのおっ！」

「変態マゾ牝おっばい、ボクのチンポじゃないとイケないようにしてやるっ！ 秋穂さんの全部はボクだけのモノなんだからっ、ボクのチンポの味徹底的に覚え込ませて、ボクから離れられないようにするっ!!」

「ザーメンやるから、自分でも乳首を思いつきり潰すんだ！ ボクのザーメンと自分の乳首責めでアクメしろっ!!」

「すりゅっ、しまひゅうらうっ、自分れ乳首虐めながらイクウウウッ！

チンポザーメンおっばいれ受け止めながら、イッちゃいまひゅうらうッ！

マゾ乳アクメすりゅうらうっ、ひぎゅっ、

マゾ牝おっばいザー汁イキしまひゅっ、おっほおおおッ——！」



「イッグウウウ〜ンッ、ドロドロザーメンシャワー浴びながら、マゾ乳精子アクメイッぎゅううンッ、おほおっ、牝マゾおっぱい精子イギすりゅうう〜っ！おっぱい噴きながらザー汁漬けアクメイイのおおっ、むほおんっ、母乳びゆるびゆるしながら精子漬け絶頂、イッグウウウ〜ンッ!!」

「ふひひ……おっぱいをオマンコ代わりにされながら、イキまくっちゃったねえ〜」

「ボクに虐められるの、最初は嫌がってたけど、もうすっかり好きになっちゃったよねえ？ 虐められるほど感じるなんて、マゾおっぱいだなあ」

「あん、おらひ、マゾおっぱいなね、虐められるほど感じちゃう、変態マゾおっぱいの牝なのね……はふううんっ」

「自分がマゾのおっぱい牝だと、私は認めたのだった。――」



「ふひひっ。秋穂さん、よく似合ってるよ、その縄と乳首の飾り」

「似合うの……？ 私、もう
牝奴隷なのね……はんっ、
心まで奴隷に堕ちてる、変態の
牝女なんだわ……はふうんっ……！」

「おっと、動いちゃ
ダメだよおろ。
今日の秋穂さんは、
肉便器なんだからね」

「に、肉便器って……、
まさかこの状態で、
おチンポを挿れる
つもりなのっ……!？」

「もちろんそうだよ。秋穂さんは
ボクのチンポ専用肉便器なんだから、
たっぷりザーメン排泄してあげるからね」

「ザ、ザーメン排泄っ!? こんな場所で精液いっぱい出して、
私をザーメンまみれにしちゃうのおっ……あふう、くうんっ……！」

「秋穂さんがボクのチンポのザーメン処理専用肉便器だってこと、
わかりやすく書いておかなきゃね」



「ああん、孕みたがりの淫乱オマンコなんてしてるしつけちゃ、イヤあつ……これじゃ誰が見ても、真正正銘おチンポ大好きのおまんこだつて分かつちゃうわっ！」

ドキ

ドキ

ご主人様
専用便所マンコ

母乳飲み
夜履

オマンコ

チンポ
大好き

「これだけじゃ足りないの？
じゃあ自分で言うんだ、
『私は直也くんのおチンポ
専用便所です』って。
言わないならずっとこのままだよ、
辛いかなあ……」

「わ、私は……直也くんのおチンポ専用の、肉便器なのおっ！」

「ふひっ、もっと下品な言ひだよ。」

「肉便器なら肉便器らしく、プライドなんか捨てなよね」

「私は直也くんのおチンポとザーメン専用肉便器だから、たくさん使って、オマンコが壊れるくらいの中出ししてほしらいのおっ！ おチンポズポズポハメて、ザー汁溢れるくらい精子漬けにしてほしらいのおっ、んひいッ——!？」

おチンポ

母乳飲み
夜履

おまんこ

チンポ
おまんこ

ご主人様
専用便所マン

おまんこ

「んっほおおおっ！
これが欲しかったのおっ、
便所マンコに欲しかったのおおっ！」

「こっちも責めてやる、そらっ！
おっばいと便所マンコ両方で感じろっ！」

「はひっ、乳首伸びちゃうッ、乳首伸ばされながら
おチンポずばずばされれっ、便所マンコ感じまひゅっ、
牝便器マンコ気持ちいいのおおっ、おっおおおんっ！」

「そうか、それならっ——」

おまんこ

「おい、命令だ！ ボクが鎖を引っ張ったら、膣を締めてチンポを刺激しろっ！ いいなっ！」

「はひららん、締めまじゅっ、便器マンコまじゅるうらうら締め付けまじゅるうらうらっ！ ふぐっ、んんんッ、あっはああんっ！」

「おお、締まったっ……！！ いいぞ、ほらもっと締めろっ！」

「おひらっ、締めりゅううらうらっ！ 便器オマンコまじゅんぎゅん締めておチンポ気持ちよくしましゅるうらうらっふっぐうっ、んううらうらっ！」

「もっと締めろっ……！ イッて、イキまくって、チンポ締め付けろっ——！」



「おひっ、んっおとおおっ!? イクウウウウッ、おっぱいピンタされてイッちゃうううっ、マゾイキすりゅううっ、ほひららんっ!」

「おっぱいぶっ叩かれて
イッてんのか、このマゾめ!
もっといケマゾ牝っ!!」

「イグッ、またイグウウウッ、ひぎっ、
マゾ牝おっぱいは叩かれて
気持ちよくなって、
イッちゃうのおおっ!
おひっ、むほおおんっ!」

「おとおっ、射精してやるぞおっ、ザーメン便所の秋穂さんの
肉便器オマンコに、ボクの精子排泄してやるぞっ!!」

「きてええっ! 直也くんの精子専用牝マンコっ、
捨てられた子種汁でありがたく受精しまひゅっ、
ザーメンゴミ箱受精イキしましゅううううっ、おっほおっ!」



「イグウウウツ、牝便器マンコザー汁アクメイギまひゅうううっ、ゼリー精子で便所卵子受精しながらイギましゅううっ、ほっおおんっ、便所マンコに牝のしるし刻まれながらイグウウツ！」



「これからもボクがたくさん使って、ザーメンで汚してあげるからね。大好きでどうしようもなく愛してるから、徹底的にボクだけのモノにするんだ。絶対、離さないよ」

「うっ……嬉ひいのおお……こんな汚れた私でも、悦んでくれるなんてえ……直也くん、私も好きっ、愛してるうっ！」

今日の私は、直せくんの命令で、胸にローターを付けさせられていた。

「ああ、柔らかあふら。オマンコもアロアロだし、すっごく気持ちさららよも」

「んあっ、はんんっ！」

強く挿んだら、あふっ、痛くて、

気持ちよくなっちやうのおっ……

あんっ、はふうんっ！

オマンコもおっぱいも

グリグリされたらああ、

はひいんっ、

気持ちよくなっちやううっ！」

「あっうううっ、ダメ、

おかしくなっちやううっ……！」

そんなに激しく揉んだら、

おっぱい取れちゃうのお、

オモチャみたいに壊れちゃううっ！」

「激しくされるのがいいんだあ？

じゃあ、もっとしてあげるねえ！」

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

グズグズ……

アッ

「ふあぁっ、胸、へんなのに、オマンコもズンズンされたらっ、んひんっ、気持ちよくなりすぎるのおおっ、ほひんっ、あっんんっ！」

「おっぱら虐めると、オマンコがどんどん濡れて、チンポ締め付けてくるよぉ。乱暴におっぱら触られるの気持ちいいんだねっ！」

アズミ

アズミ

アズミ

アズミ

すでに私の乳房を走る乳腺は膨らんで、白い乳房の表面は腫れぼったく膨れあがっていた。こんなに過敏になってきているおっぱいを、これ以上激しく責め立てられたら、快感のあまり、母乳が止まらなくなってしまうかもしれない。

「おっぱい淫乱でなっちやうっ、はうんっ、淫乱おっぱらこれ以上虐めてミルク出さなれどええっ！はああんっ、敏感おっぱい変になるうらっ！」

「もっと気持ちよくしてあげるよお、おっぱいたくさん出してっ！」

アズミ



「あははっ、跳ねる跳ねる〜！ もっとおっぱいを散らしてよ、ほらあ〜」

「あっあああっ、揺れるちゅっ、エロ乳虐められておっぱい溢れるのちゅっ、んっちゅっ〜！ はひっっ、おっぱい取れそうに痛いの感じて母乳出るウッ〜」

「あはは、いっぱいミルク出たあ〜！ おっぱい噴きながら感じてるよねえ、さっきからオマンコがキュウキュウ縮まってるよお〜」

グッ・グッ

グッ・グッ

グッ・グッ

「あっ、ああ〜……だっでえ、おっぱいもオマンコも虐められて、感じてるのちゅっ、んっちゅっちゅっ、足りなら〜……
これだけじゃ足りならのちゅっ〜」

「ふっ、はちゅっちゅっ、も、もうダメええっ……
もっと直也くんのおチンポ
欲しいのちゅっ、マンゴの身体、
おチンポで虐めてほしいのちゅっ、
んっちゅっ、んっちゅっちゅ〜」

グッ・グッ

グッ・グッ

「んあぁっ、おチンポで子宮ロズンズンズンなからおっばい弄られるの、
イイイッ、マゾ牝の身体蕩けずやうらうら、くふあぁっ、はんんッ！」

「おおっ、オマンコの肉がチンポで
絡みついでるっ！ 秋穂さんの
発情エロマンコ気持ちさらっ！」

「またっ、ひはぁっ、またイグウウッ、
牝乳首責められながら
母乳噴いてイグウッ、マゾおっばい
アクメイグウウウッンッ！」

「おっ、おおおっ、そろそろ射精るよおおっ、
ボク専用ザ―処理牝マンコに、
精子たっぷりあげるからねえっ！！」

「ひっおおおっ、
直也くん専用種付け牝マンコにっ、
精子くらしゃらさっ、おほおんっ、
卵子まれ精子漬けにしれええんっ、
直也くん専用性欲処理ザーメン
便器マンコおおっ、んほおおっ、
受精確実ドロドロ精子れパンクさせれええっ
受精イギさせれええッ——！」



「ひんっ、お、おチンポで叩かれて乳出す
おチンポ痕付がてりっ、おチンポの形付もわれてりっ、おひんっ！」

「素直に気持ちさらして言えよ、マン乳のエロ牝っ！ チンポで叩かれて乳出す
変態乳にっもっ、と変態のしるし付けてやるぞっ！」

「ひんっ、お、おチンポで
なにするのお……んひんっ、
私のおっぱい、
どうなっちゃうの、はひんっ、
ふううんっ……！」

ズッ

ズッ

ズッ

「痛いの感じて母乳まぢ散らす
変態発情アカ乳、ボクのチンポでっもっ、とイケっ！
イキまっ、れっ、ぞらあっ——！」

「ひっひっひっ！ イグウウツ、母乳噴きながら牝乳チンポアクメすりゆうつ、デカチンポで責められながらマゾ乳イギまひゆうらうらうらう！」

「乳首犯されて気持ちいいんだろ、変態のマゾ乳めっ！ マゾおっぱい、壊れるくらい犯してやるぞっ、牝乳首オナホファックしてやるっ——！」

「おひッ、母乳まだ出りゆうっ、ひほおおんっ！ おチンポでおっぱい犯されれ、淫乱牝おっぱい発情しっぱなしになりゆうらうらうっ、イキっぱなしになりゆうっ！」

ぐにゅにゅ

ぐにゅにゅ

ぐにゅにゅ

ぐにゅにゅ



「んひひひっ、イキっぱなしになりゆのらめえええ、イクの止まんないひひひっ……戻れなくなっちゃううう、んほおっ……!」

「でも、気持ちいいでしょ。今までのセックスじゃ味わえなかった、変態みたいな絶頂の味覚えたでしょ？ 秋穂さんはもう普通のセックスじゃ満足できないでしょ？ 危険日種付けHしたら、もっともっと気持ちよくなってイキまくれるんだよおくり？ だから、危険日セックスしてもいいよね」

(私は墮ちきって狂ってもいい……でも……彼の未来が……)

マズ
マズ

ム
ム

マズ

「ダメダメ……そんなの、やっぱりダメよお、受精セックスなんてやっぱり、ダメええっ……あっひひひひん……!」

「おふううらんっ!? 乳首犯されれまたイグウツ、牝乳首オナホフアックされながらイツちゃうらんっ!」

「牝奴隷マンコは直也くんの精子れ受精したいれひゅうらんっ! 発情牝奴隷卵に、直也くんの精子で種付けしれくらひゃいっ、濃厚精子孕み確実セックスしれええっ!」

「危険日種付けの前祝ひだよ、おっぱいにも種付けしてやるぞっ! 牝乳受精アクメイケええっ!!」

「直也くんのこっつりドロドロ濃厚牡ザーメンれっ、牝奴隷おっぱい確実種付けしれくらしゃいっ、牡精子受精牝乳アクメイグウツ、おおっ!」



「おっぴいっぴいんっ、発情マツ乳首に種付けされれ、乳首イギずりゅっ！
乳腺に精子ぶびゅぶびゅ入ってえ、おっぱい直也くんの精子れ
征服確実れひゅう！」

「おおおんっ、乳首と乳腺精子
受精アクメしましゅっ、
おっぱいれ精子受精しれ、
おっぱい出産すりゅのおおっ、
オナホアクメイグウウツ！」

ぶびゅるっ

ズ

ククッ
ククッ
クッ

どんなるっ

グイグイ

グイグイ



「おっ、おほおほっ……ふぁあっ、開いた乳首と乳腺、もう戻らないの……直也くんのおチンポの形覚えた、淫乱おっぱいになっちゃいまひたあっ！」

「おっぱい種付け、
気持ちよかったでしょ？
オマンコ種付けはもつとずつと、
死ぬほど気持ちいいよ……きつと、
忘れられなくなるほどね」

「ああん……忘れられなくなるくらい
すごい、危険日種付けええっ……
早くしてほしいのお、んはあっ、早く、
直也くんの精子で孕みたいっ！」

ハアッ

リア

「二度味わったら、もう危険日種付けなしじゃ
生きていけなくなるよ。期待しててよねえ……！」

んんっ♡

グッ



(ああ……ついこの日が来たのね……)

「乳首ピアスよく似合ってるよ。
これで誰が見ても、
秋穂さんはボクの所有物だってわかるね」

「あんっ、私の乳首もおっぱいも全部、
直也くんのモノになったのおお、
ご主人様にご奉仕させていただきますいっ、
牝奴隷の身体使っで、
ご主人様にお仕えしたいですう！」

「このおチンポ様にいひふっ、
おっぱいとオマンコで一生お仕えすることを、
んっんっ、誓いませしゅっ、あふううっ！」

「ボクも、この牝奴隷おっぱいを
一生使うことを、チンポで誓っよっ——！」



「ひあっ、ああああつ……！ 牝乳におチンポ様れ誓いのキスされてりゅっ、ひんんっ、牝乳首もおチンポ様に吸い付いてキスしてまひゅっ、ふああつ！ 旦那様のおチンポサイズ専用っ、むおおっ、牝オナホ乳首になりましたしゅっ、直也くんのおチンポ専用オナホおっぱいになっれ、一生ご奉仕すりゅううっ！」

「そうだ、このおっぱいは一生ボクのモノなんだから、ボクのチンポの形しっかり覚えるんだっ！」

「ひんっ、おチンポごりごりしれえっ、ぶぐっ、乳首ピアスの形になっちゃうっ、おおおっ！ ピアスの形覚えて、牝奴隷の証刻み込まれりゅううっ、ほっおおっ！」

「それだけじゃダメだ、もっと激しくおっぱい使って、おっぱいもボクのチンポの形になるようにしろっ！」

「はっ、はひいっ、んっ、ふううんっ……！」



「はひっ、おチンポまた大きくなったああっ！ 素敵しゅぎるうっ、さすが私のご主人様おチンポおっ、もつと大きくなってえ、くふううっ！」

「お、おおっ、射精そっ……！」

「出してはしらのおっ、ドドロ種付け精子いっ、ふっほおんっ、直也くんの肉嫁おっぱいに精子で種付けしてえっ、チンポ肉奴隷おっぱいにしれええっ！」

「でるぞっ！ 秋穂さんの乳首に誓いの種付けしてやるうっ！」

「ぎ、きてっ、きてえええっ、肉奴隷おっぱい一生直也くんに仕えるからあっ、おほおっ、誓いの種付けれおっぱいも孕みたいいっ、ひほおっ！ 孕み確実ザーメンれっ、むひいっ、おっぱい種付け征服されたいいっ！」



「んほっおおおおっ、牝奴隷マゾ乳種付け絶頂イギまひゅうらうっ！
乳首とおっぱいに濃厚精子れ種付けされながら、
誓いのアクメイグウウツ、おっおおおっ！」

「おっぱいも乳首も乳腺も、
全部ボクの精子で征服されながらイケっ！」

「ほひらっつ、イギまひゅうらうっ、
おっぱいの奥まれ直也くんの
精子の色に染め上げられながら、
牝乳征服孕みアグメすりゅうらうっ！」

「直也くん、私、これだけじゃ足りない……お願い、
私の子宮に、直也くんの精子で種付けしてえっ！」

「もちろん、危険日中出しセックスしてあげるよお。
ほら、チンポ挿れてあげるから、立って脚開いて」

「はい……んっ、ふうっ……！」



「ふおっ、おほおおっ、直也くんのおまんこポレえっ、危険日オマンコパンパンになってましゅっ、幸せええっ、危険日オマンコでおまんこ啜え込んで幸せええっ！」

「ボクのおまんこなんだから？ もっと腰動かして、オマンコ全体でまんこに奉仕しろっ！」

「はっはひいっ、ふっ、んうううっ——！」

「おひいっ、デカまんこポレ突かれ危険日オマンコ受精準備しちゃうううっ！」

オマンコ奉仕イイツ、ご主人様おまんこに牝奴隷まんこに

ご奉仕すりゅのイイのおっ、ほひっ、子宮とおまんこに仕えまひゅううっ！」

「私のおまんこ全部れえっ、んひっ、直也くんにご奉仕させくらひゃいっ！ほっおおんっ、全身使っれご奉仕すりゅうっ、ひっんんっ！」

「よし、もっとおまんこ締めろ、まんこっ——！」

ズッ
ズッ

おまんこ
おまんこ

「ひっほおんっ！ おおっ、痛いのイイれしゅううっ、もっと叩らてえっ、
ひざっ、マゾ牝オナホおっばい、叩いて虐めれくらしゃいっ、んひゃっ！」

「仕方ないな、マゾ乳発情牝め！
ほら、もっとオマンコ締めて奉仕しろっ！」

「ひおおっ、牝オナホマンコ締めましゅっ、
発情メスオナホれ気持ちよくなっれくらしゃいっ！
んおおっ、肉嫁マンコ締めりゅううっ、おおおっ！」

「おおっ！ ザーメン
射精そうだあっ……！」

「種付けザー汁欲しいれしゅううっ、
ザー汁びゆるびゆるしれくらしゃいっ、
危険日オマンコに子種汁れ種付けしれ
ほひいれしゅっ、むおおおっ！」

「もっと強くオマンコ締めて、
ボクのチンポ汁搾り出せっ……！」



「ひほっ、おとおおんっ！ おっぱいピアス引っ張られながら、オナホ乳牝隷属アクメイギましゅうううっ、牝乳肉奴隷イギしましゅうううっ！」

「うおおっ、ボクももう限界っ……精子出るううっ！」

「せっ精子いいっ、受精確実危険日子宮に孕み確実濃厚精子出してええっ！
一発墜ち確実発情卵子にいつ、種付けしれくらしゃいっ！」

「おおっ、でるっ！
秋穂さんの危険日卵子、ボクの精子で確実に孕ませるぞおっ!!」

「卵子妊娠準備れしゅううっ、孕ませ精子れ卵子確実妊娠 落ちさせえっ、むほおおおっ——！」



アズッ

アズッ

アズッ

にゅぎゅっ
ぬぎゅっ

ぐいゅいゅいゅっ
ぐん

「ひぎっ、イグッ、またイグウウウッ、ほひいひいッ！
危険日卵子に濃厚牡精子れ種付けされながら、
卵子孕み堕ちアグメイギまひゅううッ、おとおおッ！」

「危険日卵子孕み絶頂イグウウウッ！
子宮も卵子も直也くんの熱い精子れ
全部征服されながら、隷属肉奴隷
絶頂しましゅううッ！」

「はっひいっ、残ってる
トロトロ精子れ子宮
いっぱいになっれえッ、
ひんんッ、危険日卵子確実に
受精してりゅううッ、
今孕んでりゅううッ！」

「ひっひいっ、孕んでましゅッ、
今直也くんの精子れ危険日卵子
受精しれりゅううッ、
卵子まれ直也くんの精子れ
征服されりゅうのおおッ、ほひらっッ！」



「しあわしええ……ご主人様のザーメン種付けされれ、オナホとして最高の幸せれひゅ、これからも種付けしれほひれしゅううっ！」

「もちろんだよ。これから一生、性処理オナホ兼種付けマシコとして

秋穂さんを使ってあげる。嬉しいでしょ？ 秋穂さんはボクの牝奴隷マシコだもんね」

「はひっ、嬉しいれしゅっ！」

私は直也くんの性処理肉便器っ、

これからおお、んおおっ、

一生使っれくらしゃいっ！」



ズボッ

「一生、直也くんに種付けしれほひれすっ……一生、直也くんのオモチャとして生きていくからあっ……私は一生、直也くんの肉便器れすううっ！」



私と直也くんの愛を誓い合ったあの危険日種付けから数ヶ月後。
あの日に妊娠した私のお腹も、すっかり大きくなっていった。今日の私は、
直也くんに乳奴隷としてご奉仕するために、メイド服を身につけていた。

「んっんっ、おチンポ様もうパンパンに膨らんでらるるっ。
濃厚精子が溢れそうになっれりっのおっしゅするらるるっ。
精子欲ひいれしゅううっ、ちゅぽちゅぽっ！」

「でるぞおおっ……秋穂のオナホ回マンコ
ボクの精子で孕ませてやるぞっ——！」

「むっぶぶっ、オナホくひマンコろ喉マンコくっさるるっ。
ごひゅじんさまの孕ませ精子くらひゃららるるっ。
喉マンコ孕みイギすりゅううっ！
精子喉孕みオナホアクメイギまひゅっ。
喉マンコオナホ絶頂すりゅううっ——！」



ちゅっ
ちゅぽっ
ちゅるるっ

じゅるるっ

ぬちゅっ
ぬちゅっ

「んっおおおっ、イグッ、イグウウウッ、くひマンコれ精子受精しながらくひオナホアグメイッちゃいまひゅうっ！おっほおっ、胃で孕みながらイッちゃうううっ、おっひいっ！直也くんのしゅごい精子れ胃まれ征服されえっ、イッちゃいまひゅうっ！ 内臓も全部精子れ染められイグウウウッ！」

「オナホくひマンコ、精子孕み絶頂キメましゅうううっ、おっおっ、喉マンコも胃マンコも精子れ受精しながらイッちゃうううっ、ひっほおおんっ！」



「ふああ……はあん、胃も喉も直也くんの精子れいっぱい、んふっ、
内臓もロマンコも全部直也くんの精子れマーキングされらあつ、ふああつ……」

「はあ、はあつ……もう秋穂は、ボクのチンポ舐めてるだけで幸せそうだねえ」

「はひい、ご主人様のおチンポにご奉仕できたら幸せれしゅっ、んっ、
ずっずううっ、おチンポナメナメしたら、わらひのオマンコも
気持ちよくなっちやうのお」

「このおチンポ様になら、ちゅぶっ、わらひ、なにされれもいれひゅ……
いっぱいザーメンごくごくしらんれしゅう、じゅっじゅるっ！」

私はおチンポ様への隷属の証として、
亀頭にキスしながら宣言した。

ずる

ぐ

「これからもずっと……このおチンポ様の
オナホおっぱいとロマンコとこれ、
んちゅっ、わらひの身体、使っられはひられしゅ……ちゅぼっ」



「おほっ、おっおおおっ、おチンポ様刺さってりゅっ、電車の中なのになっ、むおおっ、オナホマンコはおチンポ啜え込んだんじゃつれましゅっ、みんな見るのに入られれてりゅうっ、オナホの証刻まれちゃつれりゅっ、正真正銘オナホおっ……！」

「ほら、向こうの乗客達なんか、みんな秋穂のこと見てるぞ。」

ゴブゴブ

電車の中でチンポ啜え込みながら母乳噴いてる秋穂のこと、みんなが変態だと思ってるだらうなあ〜」

「うっそお、完全に変態じゃんっ……！」

「あれで興奮するとか、頭おかしいよなあ……」

「おひっ、んおおおっ、変態の私の身体、もっとなんてぐらひゃいいいっ、」

変態の私、もっとなんて

見てほひいのおおっ、ほおおっ、んっおおおっ！」

しゅぽっ

しゅぽっ

ガン

ムッ

ムッ

ガン

「なら、これはどうかな……ほらっ〜」



「おっおっおっく〜んっ！ 乳首穿られりゅっ、ひびっ、
乳首の穴広がりゅうらうらっ、直せくんの指の形に広がっちゅうらうらっ、
ほひっ、ガバ乳首になりゅうらうらっ！」

「もっと広げてやるぞ。ポクの指を
啜え込めるくらゐ、ガバガバの穴にしてやるっ」

「おほおほおっ、変態乳首になっちゅうらうらっ！
ガバガバに広がったエロ乳首っ、直せくん専用だ
なりゅのおっ、むおおっ、もう戻れにゃらっ！
乳腺広がりゅのおおっ、乳首直せくんサイズになりゅっ！」

「ひひっ、エロエロな妊婦乳首、もっと虐めてあげようかなあっ！」

「おほおほおっ、乳首に直せくんの指刺さりゅうらうらっ、乳首れ直せくんの
指啜え込んじゅうらうらっ、んおおっ！ 乳首も直せくんのモノになりゅうらうらっ！」

ズズズズズ

んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ

「変態秋穂の発情妊娠おっばい、
もっと感じさせてやるよ、んんっ——！」



「ほっおほおほっ、子宮口突かれりゅうっ、おチンポ様れ
子宮口広げられりゅうっ、ほっぎゅっ！」

ズグ

「秋穂のおっぱいトロトロで美味しーらよお、
ちゅっぽっ、妊娠したから濃くなったのかな？」

「ほひーんっ、そんなに強く吸われたらっ、
孕み乳首っ、ヘンになりゅっ、おほおっ、

おっぱい吸われるのがきもひよしゅぎりのうっっ！
見られちゃってりゅうっ、おらひの変態姿、

みんなが見てりゅっのたーっ！」

「電車の中でハメられて感じる秋穂の変態淫乱妊婦姿
もっともんなに見てもらおうよっ！」

しゃまっ
は架っ

「ひっ、見られながらオマンコ感じちゃいましゅっ、
母乳出りゅうううっ、乳首ちゅっばちゅっばされれ
おっぱいたくさん噴いちゃいまひゅうっ、ふおおんっ！」

「濃いしスゴい量だあっ……

このおっぱいも、ホクのために
出してるんだよねえ、じゅぶぶっ！」

ぬがっ
ぬがっ

「おひっ、んっほおおっ！

みんなに見られながらおっぱい吸われれっ、
きもひらいのおおっ、
変態おっぱい感じましゅうっ！」

天



「おっほおっほいんっ！
直也くんの極太おチンポ様があつ、
子宮口に突き刺さつれまひゅっ、
子宮おチンポサイズに広がりゅゅゅっ！」

「どしっ……みんなが見てる前で、

秋穂の孕みマンコに種付けしてやるっ、

秋穂がボクだけのモノだって、

見せつけてやるぞおっ——！」

秋穂
秋穂

秋穂

「おほおほおっ……っ、精子くらしゃらっ、孕みマンコも一発墜ち確実な
特濃孕ませ精子いっ、ポテ腹子宮にびゅるびゅるしれええっ、むほおおっ！」

「お、おおっ……そろそろ、でるっ！」

秋穂の妊娠マンコ、ボクの精子でまた孕ませてやるうっ!!」

秋穂

「直也くんのおチンポ処理専用妊婦マンコに種付けしれええっ、

んっおおおっ、おチンポ汁れ妊婦孕み絶頂しらいれしゅっ、ふおおおんっ！

いつでも受精OKの直也くん専用孕み子宮にっ、

新鮮ドロドロ精子れ種付けしれくらしゃらっ、孕みましゅっ、んおおっ！」

秋穂
秋穂

秋穂
秋穂



「あっおっおっおっ〜んっ、妊婦マンコレ
また孕みながらイグウウツ、
濃厚牡精子れ受精卵子墮とされながら
アグメイギまひゅうううっ、ほおおっ！」

「びっららんっ、イグッ、
またイグウウウツ、精子れ
妊娠子宮征服されながら
イツちゃいまひゅっ、
牝オナホ孕みアグメイグウツ！」

「公衆の面前れ精子アヘアグメイイれしゅうううっ、
わらひの受精姿みんなもつと見れえっ、ふざいっ、
オナホマンコ見れくらしやいいいッ！」



たとえ電車の乗客たちから白い目で見られても、
直也くんにおっぱいを捧げられることが嬉しかった。
直也くんにおっぱいを捧げる幸福感は、
私ほどこが電車の中ということも忘れて、浸っていた。

「ボクここに横になつてゐるからさ、秋穂が騎乗位でご奉仕してよ」

「は、んあぁっ、牝ママンロで奉仕しますっ、ぶらっマンツ——！」

「おほっ、おっおおおっ、いらつもより深くおチンポ様くりゆうううっ！
ひはおおんっ、デカチンポ様突き刺さりましゅっ、むおおおんっ！」

「秋穂のオマンロもうぐちよぐちよじゅん。

洗い物しながら、ボクのチンポのこと考えてオマンロ濡らしてたのおっ？」

「は、はひいっ、洗い物しながら、牝オナホマンロ濡らしれまひたあぁっ、ふはおおんっ、セックスのこと考えて濡らしてたのおおっ！」

「このおチンポ様が欲しかったのおおっ、おおっ、ほはおおんっ、ずっとご奉仕したかったのっ、ふはおおっ、おチンポ様好きれしゅっ、ひっほおおっ！」

おっおっ
ぶがぶが

おっおっ



「おおっ、ミルク出たあつ、これを待ってたんだよねえ……
んぐんぐ、美味しいよ、秋穂の搾りたて母乳！」

「ああっ、うれひいっ、ほおおんっ、
わらひの搾りたて新鮮妊婦
ミルクもつと飲んでくらしやいっ、
びゆるびゆるしましゅううっ！」

「孕みおっぱいの濃厚妊婦ミルク、
出ましゅうううっ！
びゆるびゆるしれ感じりゅううっ！」

「濃いミルク美味しいっ……ふう、
でもこれだけじゃまだ足りないなあ」

「はいっ、んっんんっ、牝穴マンコ使っれ、
大好きなご主人様に精一杯
ご奉仕させれいくださいませしゅ、おほおっ——！」



「イグッ、イギまじゅううううッ、ドログチヨ濃厚ザーメン孕み子宮にぶっかけられながら、妊婦アグメイッグウウウッ」

「孕み卵に二重種付け
されながらイッちやいまひゅッ、
オナホマンコ二重妊娠
アグメずりゅうううッ、
種付けアヘイキしまじゅうううッ」

「孕み子宮に濃厚ザー汁
染み込まれまじゅッ、ふおおッ、
牝奴隷オナホマンコに
ザーメンの匂い付いたのおおッ！」

私のお腹は直也くんのザーメンで
パンパンに膨れあがっていた。



「ひんっ……はひら、出っつたっただだだザーメン、
こんなんじゃいぼられるわ、おはもっ」

私は秘唇を指で広げながら
膣内を満たすザーメンの
量を直也くんに見せつける。

グ
イ
ム

「オナホマンコにたくさん
精子注いでいただいれ、
わらひ幸せれしゅううっ、
おチンポ様専用オナホとしれ
幸せしゆぎれしゅっ、おおんっ♪」

「……赤ちゃん産んだら、また種付けしてあげるよお。
秋穂のこと大好きだから、何度でも孕ませるつもりだよ」

「はい、たくさんたくさん種付けしてくれらしゃい、
ご主人様の子種、何度れも孕みましゅっ……
ご主人様のザー処理専用オナホれしゅからっ♪」

おっ
おっ

「直也くん、お待たせしました」

寝室で私を待っている直也くんの前に、牝牛のコスプレをして現れる。

「わっ……秋穂、その格好、どうしたの!？」

「もうすぐ出産でセックスができないから、
せめておっぱいで楽しんで
もらおうと思って……イヤですか?」

「イヤなわけではないよお、
むしろ早くおっぱい吸いたらよっ!
ねえ、早くおっぱい出してさー!」

「はい、牝牛の秋穂が、
ご主人様におっぱい
ご奉仕します、んふうラッ——!」

「秋穂のおっぱい、
ボクに弄ってほしいように揺れてるう、
たっぷり弄り回してあげるよおっ!」



「んひっ、ほおんっ！ ららめえっ、そんなに強く噛まれたらあぁっ、ひおっ、おっぱいだけイッちゃうっ、おほおっ！」

「イッてみなよ、もっと強く噛んであげるから……んっぐううっ！」

「ひぎっ、イ、イッちゃいましてっ、おっぱい噛まれれマゾ牝オナホアグメイグウウッ！もおっ、ぶっもおおっ、マゾ牛アグメイッぎゅうううっ！」

乳
ルッ

び
び
び

「牛みたいに鳴くの似合ってるぞっ！もっと鳴けっ、おほおっ！」
「いぎっ、乳首虐められれマゾイキイッグウウウッ！マゾ牝おっぱいマゾアへ絶頂イキましゅうううっ、おほおっ、んっ！」

「秋穂だけじゃなくて、ボクもチンポで気持ちよくなりたいたいだよねえ……おっぱい、使わせてもらっようっ——！」

グ
グ
グ
ルッ

「ひっぴい、いいンツ、チンポ穴空くうううッ、ほっほおおッ、おチンポ様オナホ乳ファックしゅごいれしゅッ、もうコレじゃないとイケなくなりゅッ、おひいらんっ！」

「ボクのチンポで犯されないとイケなくなるように、このオナホ乳にチンポの形刻み込んでやるぞっ！」

「ひっぴい、ンツ、マゾ牝
オナホおっぱい、濃厚精子れ
汚しれほじいれすッ、
おひっおおッ、ザー処理オナホの
しるしつけくらじやいっ！」

「でるっ！ 秋穂のボク専用オナホ乳、
ボクのザーメンで孕ませてやるぞおッ、
妊娠オナホおっぱいにしてやるううッ!!」

「ご主人様のグチヨグチヨ濃厚精子汁れ
オナホ乳妊娠しましゅうううッ、
おっぱいでも孕んで全身ご主人様に
捧げましゅううッ、んほおおッ！」



「ひぎッいいいいッ、イツちゃいましゆうううッ、
オナホ牝乳種付けされながらイッグウウウッ！ おっぱい種付け
絶頂イギましゅっ、むおおおんっ！」

「おほっっおっぱい孕みアクメ止まんなああいいッ、
乳首で受精しながらイギまくりゆううッ、
オナホ乳精子絶頂イグのおおっっひっおおっっッ！」

「牝オナホ乳確実孕み絶頂しちゃいましゅっ、
おひっ、乳受精アクメ止まんたやらッ、
オナホおっぱい受精絶頂しゃららッなのおっ！」

「……じゃあ、ザーメンが出なくなるまで、
秋穂のおっぱい犯してあげるよ——！」

数十分後……。



「あひ、おとおっ……も、もうらめえ、おっぱいの穴開けなくなったちゃうえ、んひっ、チンポサイズの穴開いてりゅのっ、んお、おひひっ……!!」

洗っても取れないのではないかと思うほど、濃厚な精臭が身体にまわりつらで、私がザーメン処理用オナホであることを雄弁に語っている。

何度となく犯された私の乳首の穴は、ぽっかりと開いて、再びおチンポを挿れてもらえらることを待ちわびるようにくぱくぱと震えている。

開いた乳頭からは母乳と、幾度となく射精された精液が混じり合って溢れ出し、私の乳房をさらに白くどろどろに汚してゆく。

乳腺に残っていたびゅるっと母乳が噴き出るたびに、

おっぱいを激しく犯された快感が甦って、頭が弾けるように白く染まる。

「はひっ、しあわしええ……」

おっぱいがバカになるくらい使われれ、オナホのおっぱいにおチンポの形刻み込まれれ、しあわしええなのっ!!」



その後、私は無事に直也くんの赤ちゃんを出産した。
これで、オマンコがまた以前と変わらず使えるようになったのだ。

私たちが忍び込んでいたのは、私が入院している産婦人科の分娩室だった。
出産後、安定のためにまだ入院している私の元を直也くんが訪れた。
そして、分娩室で種付けセックスをしたいという直也くんの望みで、
私達はいけないと思いつつも分娩室に入り込んでいたのだ。

「ほらほらあ、せっかくカメラで写してるんだから、もっとアピールしてよ。
オナホマンコらしくね」

「は、はい……ああん、真野秋穂です♪ 今日、出産したばかりの
オナホマンコに、ご主人様にまた種付けしていただけるので、嬉しいですよ♪
直也くん専用の種付けオマンコが、久しぶりに受精できるので嬉しいです、
たくさん精子注ぎ込んでもらって、いっぱい孕みたいと思いますよ♪」

「濡れ濡れオマンコ、コレでもっとよく見てあげるよお」



「んあつ、はああんっ——!? オ、オマンコ広げられてりゅっ!?」

直也くんが手にしたクスコで、オマンコを広げられて、普通なら絶対に他人の目には触れない膣奥までもがさらけ出される。それだけで責めが終わるはずもなく、直也くんは私の両乳首にローターをねじ込み、外れないようにテープでしっかりと留める。

「ふおおんっ、乳首らめえっ、ひびっ、響くううっ、おっぱいの奥まで動いてるの来りゅうううっ、おおっ、ビリビリすりゅうううっ!」



「ひっいいいっ、一番奥まで直也くんに見られちゃってるっ、おほっ、むほおおっ、オナホマンコの奥の奥まで全部見られてるのおおっ!」

「おチンポおっ、おチンポくだしやいっ、んひっ、オナホマンコに早くガチガチおチンポ挿れてええ、ザー汁びゆるびゆるして種付けセックスしてええっ!」

「……じゃあ、そろそろあげようかなあ、秋穂の大好きなコレをねっ——!」

「おほっおっおおっ、おチンポ様きてりゅううラッ！濡れ濡れ発情エロマンコにデカチンポ様あつ、奥まで挿入つてきてりゆのっ、ひおおおっ！」

クスコを引き抜いた直也くんが、硬く反り返っていたペニスを一息に私のオマンコに突き入れる。

「しゅっ、しゅっ、ひいっ、おチンポ様れオマンコの中ぐちよぐちよにされてりゆ、んひっ、蕩けりゅううっ、おチンポ様れオマンコ溶けちゃいまひゅっ！」

ズッ
ズッ

ズ
ズ
ズ

ズ...

あ
あ
あ

「お、おおっ、オマンコトロトロっ……！ふうふうっ、秋穂、こんな場所でチンポ啜え込んで、いつもよりずつと感じちゃってるんだねえっ！」

「はい、感じてましゅっ、変態秋穂の出産済みオマンコはっ、

ほっおおっ、分娩室れおチンポ啜え込んで感じれりゆのおおっ、おひいっ！」

ズッ

「おひっ、んひおおおッ、挟られりゅっ、はひんっ、

おチンポ様れ子宮口ぐりゅぐりゅ穿られりゅうううっ、子宮壊れりゅっ!」

「おほっおっおおっ、出産子宮チンポサイズに広がっれ気持ちいいっ、
子宮口太チンポ様れぐいぐい大きくされれ感じりゅうううっ!」

「またボクの赤ちゃん孕みたいのかっ、秋穂っ!!」

「んっおおっ、ほひいっ、二人目受精したいのおおっ、出産済みマンコに
二人目種付けしれくらしゃいっ、絶対受精しろいのおっ、んひっんっ!」

ぢゅぶぢゅぶ

あ、ちゅるるっ

ぢゅぶ

ぢゅぶ
ぢゅぶ
ぢゅぶ

「おお、孕ませてやるぞっ! 二人目
だけじゃなくて、三人目も四人目も一緒に孕ませてやるっ!」

「むひっ、絶対孕んれ全部捧げりゅうううっ、プリプリの
濃厚ザーメンれ受精しれっ、卵子まれ直也くん捧げちゃいませゅっ!」

あ、ちゅるるっ

「むおおおんっ、また孕みたいのおおっ、直也くん専用妊婦
マンコになりゅううっ、ひほおおっ、グチョネバ精子れ産後卵子受精するうッ!」

「ひっぎいいいいッ、イグのおおっ、二人目の赤ちゃん受精しながら子宮孕み精子征服アグメイッぢやいまひゅうううっ、受精イギずりゅうううっ！」

「おっ、んほおおっ、精子が危険日子宮の中びゆるびゆるっれ、泳いれりゅのおおっ、絶対着床すりゅうううっ！」

「これだけザーメン注ぎ込んだんだから、確実に孕んでるよねえ」

「は、はひい、絶対受精しれまひゅううっ……」

「よし、じゃあ——」



「これでOK。変態淫乱マゾ牝の秋穂には、こんな姿がお似合いだろ」

「はひっ、私は直也くん専用のオマンコれす、たろっくさん種付けされれ、また孕んじやいましたあ、ピースっ♪」

「今日孕んだ子供産んだら、またすぐに種付けセックスして孕ませてあげる。楽しみにしてなよ」

「そ、その赤ちゃん産んだら、また種付けセックスしれ、孕ませれほしいれしゅっ……」



「もちろんだよ。秋穂はボク専用種付けマンコなんだから、一生孕ませ続けてあげるよ」

「ああ……一生、ご主人様に使ってもらえるなんて、なんて幸せなおお……ひんんっ！ご主人様、愛しています……」

私は、全身が蕩けるほどの恍惚感に笑顔を浮かべながら、これからも一生直也くんの忠実な牝オナホ妻として生きることを誓うのだった……。

END



大人の禁SEXY絵本

©Miel